

病院での高齢者看護学実習における学生の学び －ケースレポートの分析を通して－

Students' Learning through Gerontological Nursing Practice in the Hospital

－ By analysis of case reports －

中川 孝子 杉田 由佳理 太田 尚子 三田 禮造
Takako NAKAGAWA Yukari SUGITA Naoko OTA Reizo MITA

青森中央短期大学 看護学科

Aomori Chuo Junior College, Department of Nursing

Key words：高齢者看護学実習，ケースレポート，病院

I. はじめに

わが国の高齢化は著しく、平成24年度の総人口に占める65歳以上人口の割合（高齢化率）は24.1%となった。介護保険制度の実施を始めとした保健医療福祉制度の変化とともに老年看護活動の場は病院から高齢者施設、在宅へと拡大している。そのような背景のなかで、老年看護学の果たす役割は大きく充実が期待されており、臨地実習は4単位が配当されている。

本学の看護学科は平成18年に開学されたが、それ以来、高齢者看護学実習は高齢者施設で2週間、病院で2週間の計4週間の実習を行ってきた。開学当初は高齢者施設での実習を1年前期に位置づけていたため、看護援助は見学が中心であり、高齢者と触れ合いコミュニケーションを図ることが大きな目的であった。また病院での実習は2年前期に行われており、一人の高齢者を受け持ち看護過程の展開を行うことで、高齢者のQOLの維持・向上を目指した援助ができる能力を養うことが目的であった。カリキュラムの変更を行うにあたって、病院での実習を高齢者看護学実習Ⅰ（2年前期）、高齢者施設での実習を高齢者看護学実習Ⅱ（2年後期）と位置づけ、平成22年度から高齢者施設での実習においても一人の高齢者を受け持ち、看護過程の展開を行う実習とした。両者とも実習目的はライフステージにおける老年期の課題および老年の特性を理解し、さまざまな健康レベルや状況下において、QOLの維持・向上を目指した援助ができる能力を養うこととしている。病院で実習を行う高齢者看護学実習Ⅰでは慢性期とはいえ、治療中心に看護が展開されることとなる。それに比べ、高齢者施設で実習を行う高齢者看護学実習Ⅱでは、疾患や障害を有しながら生活することに主眼をおいた看護を展開する。この看護の違いは実習における学生の学びにも影響があるのではないかと考えた。住吉ら¹⁾は、老人病棟では治療の必要な患者のケアを通して高齢者の特徴を学び、老人ホームで

は生活の援助を通して個別性の大切さを学んでいたと述べている。本学においても、同様にそれぞれの実習における学生の学びの内容を検討することは今後の高齢者看護学実習の内容や指導のあり方を検討していく上で意義のある資料になると考えた。

今回はまず第一報として、病院における高齢者看護学実習での学生の学びの内容を明らかにしたので、その内容を報告する。

II. 研究目的

最終的には、病院と高齢者施設における高齢者看護学実習での学生の学びの内容を分析し、高齢者看護学実習ⅠとⅡの学びの違いを明らかにすることを目的とする。本研究の目的は、病院における高齢者看護学実習での学生の学びを明らかにすることである。

III. 高齢者看護学実習Ⅰの概要

1. 実習目的・目標

ライフステージにおける老年期の課題および老年の特性を理解し、さまざまな健康レベルや状況下において、QOLの維持・向上を目指した援助ができる能力を養う。

- 1) 高齢者の加齢に伴う変化と健康障害を理解できる。
- 2) 高齢者の加齢に伴う変化と健康障害が日常生活に与える影響について理解できる。
- 3) 高齢者の健康の維持・増進、疾病予防、QOLの維持・向上のための援助ができる。
- 4) 高齢者と家族を取り巻く保健・医療・福祉システムの現状を知る。
- 5) 高齢者観を深め、高齢者を敬愛する態度を身につける。

高齢者看護学実習Ⅰでは高齢者観を高齢者のイメージや高齢者への思いと定義づけている。

2. 実習期間

平成25年8月19日～9月13日

3. 実習施設

A市内5病院

4. 実習方法

65歳以上の高齢者、可能であれば75歳以上の高齢者を1名受け持ち、看護過程の展開を行う。1クール2週間とし、計2クールの実習を行う。1週目は情報収集、アセスメント、看護診断を行い、看護計画の立案をする。2週目は立案した看護計画を元実践を行い、評価・修正をしていく。

5. ケースレポートの作成について

高齢者看護学実習Ⅰの終了後に、「実習で得た高齢者看護の学び」をテーマとし、受け持ち高齢者との関わりや援助のなかで得た高齢者看護の学びについて、理論や文献を用いて考察にまとめる。(3,200字程度)

IV. 研究方法

1. 研究対象

平成25年8月から9月に高齢者看護学実習Ⅰ（病院実習）を行った学生85名のうち、研究協力に同

意の得られた学生のケーススタディのレポートを分析対象とする。

2. 研究期間

2013年7月～2014年1月

3. データ収集方法

研究協力に同意の得られた学生のケーススタディのレポートからデータ収集を行った。分析対象としたデータはケースレポート中の受け持ち高齢者の特性（性別、年代、疾患名）と考察とまとめて記述されている受け持ち高齢者の看護体験を通じての高齢者看護学実習における学生の学びについて記述されている内容から意味のまとまりごとにデータを抽出した。

4. 分析方法

研究者全員で学生のレポートを精読し、学生の受け持ち事例の特性として、施設別に年代、性別、疾患名を整理した。また、ケースレポートの考察とまとめにおける高齢者看護の学びが記述された内容から意味のまとまりごとにデータを抽出し、コード化した。内容の類似性に着目し、分類し、サブカテゴリー・カテゴリー化を行った。また信憑性の確保のために共同研究者によるグループ討議を行い、それぞれのカテゴリーの内容の妥当性を検討した。

5. 倫理的配慮

本研究は青森中央短期大学研究活動推進委員会の許可を得て実施した。

対象学生に対し、本研究の目的と内容、自由意思による参加、拒否や途中中断する権利、研究参加の可否が成績評価に影響しないこと、プライバシーの保護を保証することを口頭と文書をもって説明した。レポートの内容については、個人情報の保護・匿名性を保持すること、データは研究者が厳重に保管し、データの処理が終了次第、シュレッダー処理をすること、このデータは研究以外の目的には使用しないことを説明した。研究の了解に関しては文書で同意を得ることとし、同意書は、1週間の期間を設け回収箱に提出とした。

V. 結果

研究協力の同意が得られた学生78人のレポートを分析対象とした。回収率は92.8%であった。

1. 学生の受け持ち事例の特性

研究協力の同意が得られた学生の受け持ち事例の特性については表1（性別）、表2（性別と年代）、表3（疾患名）に示す。

表1. 学生の受け持ち事例の性別 n : 78

性別	人数（人）
男性	26
女性	52

表2. 学生の受け持ち事例の特性（性別・年代）

n : 78

	70歳代		80歳代		90歳代	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
人数（人）	8	6	15	25	3	21

表3. 学生の受け持ち事例の特性（疾患名）

n : 78

疾患名	人数（人）	疾患名	人数（人）
下咽頭がん	1	パーキンソン病	3
脊髄小脳変性症	3	うつ血性心不全	2
うつ病	1	脱水症	1
頸髄損傷	2	電解質異常	1
腰部脊柱管狭窄症	3	慢性腎不全	2
廃用症候群	8	胃がん	2
肺炎	6	腸閉塞	1
脳梗塞	11	認知症	9
慢性硬膜下血腫	1	食道潰瘍	1
骨折	16	糖尿病	1
脳出血	1	褥瘡	1
変形性股関節症	1	脳器質性精神障害	1

*1人の受け持ち事例につき優先順位の高い疾患を1つのみ挙げている

2. ケースレポートを通しての高齢者看護学実習の学び

ケースレポートの考察とまとめの部分に記述されている受け持ち高齢者の看護体験を通じての高齢者看護学実習における学生の学びについては表4に示す。

高齢者看護学実習における学生の学びとして、3つのカテゴリーが生成された。以下、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >, 元データは「 」として示す。

表4. 高齢者看護学実習の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	元データ
高齢者観の認識	高齢者の思いの推察	<ul style="list-style-type: none"> ・今までできていたことができなくなることへの不安やストレスがある
	身体的な面の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・症状が出にくい ・1日の中でも体調の変化がみられる ・既往歴や合併症が多い
	高齢者の強みの理解	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな人生経験から習得した適応力がある ・人生経験が長く人を見抜く力をもっている ・人生の先輩で敬う対象である ・人に頼ろうとしない強みを持っている
高齢者看護の実践	高齢者のリハビリテーション看護の実践	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者のADLの拡大に沿った観察や援助を行う ・自力で可能な範囲を判断し、補助具の必要性を決める ・障害の程度に合わせて環境を整え、ADLの自立を支援する ・転倒リスクを考え、危険から守れる態勢を作る ・残存機能の維持ができる日常生活が送れるような支援をする ・離床時間の確保を行うことがリハビリに繋がる
	意欲を高める看護実践	<ul style="list-style-type: none"> ・声掛けのしかたで高齢者の意欲の程度に差が出る ・排泄の自立への援助は意欲の向上に繋がる ・話題提供の内容により意欲を引き出すことができる
	コミュニケーションに関する看護実践	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の興味ある話題でコミュニケーションを図る ・高齢者の生活史や新聞などの話題でスムーズに話す ・高齢者が自ら話したいと思う話題を提供する ・高齢者の強みや好きなこと、望んでいることを会話から引き出す ・非言語的コミュニケーション（表情、声のトーン、身振り、手振り）に注目する ・構音障害のある高齢者には質問のしかたを工夫する ・日頃からコミュニケーションを図り、信頼関係を保つ

高齢者看護の実践	高齢者への個別性のある看護実践	<ul style="list-style-type: none"> ・その人の趣味や興味を見つけ、心身共に充実した生活が送れるように援助する ・生活歴や性格を重視した援助を行う ・高齢者の不安な思いや伝えられない思いなどを読み取る ・高齢者の体調に合わせた負担にならない援助をする ・高齢者の長年の考え方や習慣を否定せず、提案する形で関わる ・高齢者の意思を尊重する ・その人の立場で感じ考えることにより、その人が直面している問題を解釈し理解を深める。 ・1日のなかで高齢者が楽しめるものを提供していく ・その人らしい生活を送ることが大切である。
	認知症高齢者への看護実践	<ul style="list-style-type: none"> ・一定の距離を保ちながら、寄り添う ・動作を繰り返し行い、言葉だけでなく体で慣れてもらう ・短文で話し、同じことを繰り返し伝えて印象づけるようにする ・患者の行動の的確な把握と同時に、いつでも受け止められるように冷静な対応をする ・物とられ妄想では妄想が強くなる前に話題を変える ・受容、傾聴、敬語、けじめ、共感を踏まえて関わる
	観察の重要性	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者は自覚症状が乏しいため観察力は重要となる ・コミュニケーションによる観察、目で見える観察は共に大切である ・起こり得る症状を予防するためにその観察が大切 ・少しの変化も気づけるような観察が必要 ・顔色、表情、動作などいつもと違うと感じたらよく観察する ・客観的に広い視野で情報収集を行う ・スケールによる観察をする ・全身状態の観察を行う
	見守る看護実践	<ul style="list-style-type: none"> ・見守る姿勢が大事 ・プライバシーに配慮し、さりげなく見守る

高齢者看護の実践	尊厳ある看護実践	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者の価値観を理解し尊厳をもって接していく ・ 身体拘束はできる限りなくし、やむを得ない場合もその人の立場になって考える ・ 高齢者のプライドを傷つけない
	強みを生かした看護実践	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自力でできることは援助せず見守る ・ その人の現在の能力を生かした看護介入を行う ・ 高齢者の強みを生かした看護実践を行う
	高齢者の特徴に合わせた看護実践	<ul style="list-style-type: none"> ・ 予備力や回復力が低下しているため、休息を多めにとり体調に合わせた看護実践をしていく
援助者としての自覚	援助の基本的姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・ 援助は患者とその家族の意向に基づいて行われなければならない ・ 高齢者は長年の生活習慣があり、援助は高齢者の同意を得たうえで行う ・ 常に根拠をもって援助を行う ・ 高齢者にとって最良なことは何なのかを考える ・ 高齢者に援助の意味を理解してもらう ・ なぜその援助が必要なのか説明し理解してもらう
	看護師の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・ 医療行為を行うと共に、快適な入院生活を送れるようにする ・ 自分のみで考えるのではなく多職種から情報を得、援助の工夫をする
	援助者としての気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者のADL拡大の困難さや重要性を実感した ・ コミュニケーションをスムーズにとることの重要性を実感した ・ 意欲を引き出すことの重要性を再認識した

1. 【高齢者観の認識】

「症状が出にくい」、「1日の中でも体調の変化がみられる」、「既往歴や合併症が多い」など、＜身体的な面の理解＞ができていた。また、「豊かな人生経験から習得した適応力がある」、「人生経験が長く人を見抜く力をもっている」、「人生の先輩で敬う対象である」、「人に頼ろうとしない強みを持っている」など＜高齢者の強みの理解＞ができていた。また、「今までできていたことができなくなることへの不安やストレスがある」という高齢者の言動や表情から、＜高齢者の思いの推察＞をしていた。＜身体的な面の理解＞、＜高齢者の強みの理解＞、＜高齢者の思いの推察＞という3つのサブカテゴリーから【高齢者観の認識】が導き出された。

2. 【高齢者看護の実践】

1人の患者を受け持ち看護過程の展開をする実習であったためか、看護実践に関する学びが多かった。「障害の程度に合わせて環境を整え、ADLの自立を支援する」、「転倒リスクを考え、危険から守れる態勢を作る」、「残存機能の維持ができる日常生活が送れるような支援をする」など、リハビリテーションを行っている高齢者に対する看護師としての役割を意識した＜高齢者のリハビリテーション看護の実践＞についての学びがみられた。また、「一定の距離を保ちながら寄り添う」、「動作を繰り返し行い、言葉だけでなく体で慣れてもらう」、「短文で話し、同じことを繰り返し伝えて印象づけるようにする」、「物盗られ妄想では妄想が強くなる前に話題を変える」、「受容・共感・敬語・けじめ・共感を踏まえて関わる」など、具体的に＜認知症高齢者への看護実践＞の学びがみられた。

実習を行っていくうえで、看護過程の展開は大きな位置を占めることとなるが、情報収集や看護の実践を行う過程で、受け持ち高齢者とスムーズなコミュニケーションを図ることは欠かせないこととなる。「高齢者の興味ある話題でコミュニケーションを図る」、「高齢者の生活史や新聞などの話題でスムーズに話す」、「非言語的コミュニケーション（表情、声のトーン、身振り、手振り）に注目する」、「日頃からコミュニケーションを図り、信頼関係を保つ」など、高齢者とコミュニケーションをスムーズにとるためにはどうすればよいのかという実際の経験から得た＜コミュニケーションに関する看護実践＞の学びが表現されていた。また、「高齢者は自覚症状が乏しいため観察力は重要となる」、「少しの変化も気づけるような観察が必要」、「顔色、表情、動作などいつもと違うと感じたらよく観察する」、「スケールによる観察をする」、「全身状態の観察をする」など看護の基本といわれる観察についての学びがあげられていた。また、看護過程の展開を行っていくなかで、学生は、＜意欲を高める看護実践＞、＜高齢者への個性のある看護実践＞、＜見守る看護実践＞、＜尊厳ある看護実践＞、＜強みを生かした看護実践＞、＜高齢者の特徴に合わせた看護実践＞など、高齢者に必要と考えられる看護の学びを得ていた。

3. 【援助者としての自覚】

「援助は患者とその家族の意向に基づいて行わなければならない」、「高齢者は長年の生活習慣があり、援助は高齢者の同意を得たうえで行う」、「常に根拠をもって援助を行う」、「高齢者にとって最良なことは何なのかを考える」など臨地での実習体験により、＜援助の基本的姿勢＞を考える機会をもち、高齢者へ援助を行う際の姿勢についての学びを得ることができていた。また、「医療行為を行うと共に、快適な入院生活を送れるようにする」、「自分のみで考えるのではなく多職種から情報を得、援助の工夫をする」など＜看護師の役割＞について認識できていた。また、「高齢者のADL拡大の困難さや重要性を実感した」、「コミュニケーションをスムーズにとることの重要性を実感した」、「意欲を引き出すことの重要性を再認識した」という感想をもち、＜援助者としての気づき＞をすることができていた。

VI. 考察

1. 学生の受け持ち事例の特性

学生の受け持ち事例の性別は男性が26名（33%）、女性が52名（67%）であり、受け持ち事例の性別は70歳代が14人（18%）、80歳代が40人（51%）、90歳代が24人（31%）であった。学生の受け持ち

事例の性別は日本の平均寿命の男女差を反映していると考えられる。学生の受け持ち事例の年代は80歳から90歳代で全体の8割を超えており、学生のほとんどは高齢者看護学実習において、後期高齢者を受け持ちすることができていた。

後期高齢者は高齢者の身体的・精神的・社会的な特徴をより顕著に有していると考えられ、学生は加齢の特徴を現実的に体験できる環境が整えられていたと思われる。

学生の受け持ち事例の疾患名については、1人の受け持ち事例につき優先順位の高い疾患を1つのみ挙げている。全部で25疾患であったが、その中でも、多い疾患は廃用症候群（8人）、肺炎（6人）、脳梗塞（11人）、骨折（16人）、認知症（9人）であった。これらの疾患は高齢者に多い疾患として講義の中で学んでいる事例であった。宮地²⁾は本来、教育は講義・演習・実習と一連の授業形態のもとに教育内容を相互に関連させながら進めていくものであると述べている。演習での事例展開に限界はあるが、臨地実習において同じ疾患の事例を体験できることは教育内容を相互に関連させるという視点において有効性が高いと考えられる。

2. ケースレポートを通しての高齢者看護学実習の学び

高齢者看護学実習における学生の学びとして、【高齢者観の認識】、【高齢者看護の実践】、【援助者としての自覚】という3つのカテゴリーが導き出された。

1) 高齢者観の認識について

実際に高齢者と接したことで、「症状が出にくい」、「1日の中でも体調の変化がみられる」、「既往歴や合併症が多い」など、＜身体的な面の理解＞ができていた。また、「豊かな人生経験から習得した適応力がある」、「人生経験が長く人を見抜く力をもっている」、「人生の先輩で敬う対象である」、「人に頼ろうとしない強みを持っている」など、高齢者に対してポジティブな印象を抱いており、＜高齢者の強みの理解＞ができていた。反対に、「今までできていたことができなくなることへの不安やストレスがある」というネガティブな印象も抱いており、高齢者の言動や表情から、＜高齢者の思いの推察＞をしていた。＜身体的な面の理解＞、＜高齢者の強みの理解＞、＜高齢者の思いの推察＞という3つのサブカテゴリーを総合的に考えた結果、【高齢者観の認識】が導き出されたが、学生の高齢者のイメージは確実に明確化したと考える。

高齢者看護学実習Ⅰでは、実習目標の1つに『高齢者観を深め、高齢者を敬愛する態度を身につける』をあげている。実際に高齢者と接し看護過程の展開をすることで、学生は率直な高齢者のイメージや高齢者への思いをケースレポートに記述したのではないかと考える。桑原³⁾は老人観に影響を与える要因としては、同居または別居の有無よりは老人との交流経験・接触経験の有無が重要であると述べている。また、伊藤⁴⁾は看護学生の高齢者のイメージは実習前後で大きな変化が期待できるため、臨地実習において高齢者に接する機会をより効果的に活用できるようにしていく必要があると述べている。高齢者観を深めるという実習目標の達成のためにも、受け持ち高齢者の選別は重要であることを再認識することができた。

山田⁵⁾は老年看護の展開では対象者が望む生活は何かを重視する。同时对象者のもてる力に着眼する。生活を営むうえで対象者のプラスの側面を前面に引き出すことができるよう支援すると述べている。同様に高齢者のもてる力に着眼し、高齢者の強みを明らかにし看護の展開をしていくことの必

要性や重要性を講義や演習のなかで伝えてきたが、学生は高齢者との関わりのなかで無意識に高齢者の強みを探していたのではないかと考える。

臨地実習における高齢者との関わりのなかで、ネガティブであれ、ポジティブであれ、多様な高齢者観をもつことは今後、高齢者への看護をしていくうえで重要なことであると考えられる。学生が多様な高齢者観をもつことは、高齢者の身になって看護の実践ができることにつながっていくのではないかと考える。

2) 高齢者看護の実践について

1人の高齢者を受け持ち看護過程の展開を行うことにより、学生は様々な【高齢者看護の実践】の学びを得ていた。＜高齢者のリハビリテーション看護の実践＞や＜認知症高齢者への看護実践＞として、リハビリテーションと認知症についての看護実践の学びが具体的に示されていたのは、実習施設が回復期リハビリテーション病棟や認知症病棟を有している病院が多かったためではないかと思われる。実際にリハビリテーションを行っている高齢者や認知症高齢者との関わりのなかで、具体的な看護実践の学びを得ることができたのではないかと考える。

看護は観察で始まり観察で終わるといわれている。ナイチンゲール⁶⁾は、看護婦に課す授業のなかで、最も重要でまた役に立つものは、観察とは何か、どのように観察するか、どのような症状が病状の改善を示し、どのような症状が悪化を示すか、どれが重要でどれが重要でないのか、どれが看護上の不注意の証拠であるか、それはどんな種類の不注意による症状であるかを教えることであると述べている。学生は様々な＜観察の重要性＞についての学びを記述しているが、ナイチンゲールが指摘しているような、何のために、何を、どのように観察するのかという具体的な内容には至っていない。また、学生からは＜コミュニケーションに関する看護実践＞として多くの具体的なコミュニケーションの学びが抽出されていた。小野ら⁷⁾の同じく高齢者看護学実習におけるケースレポートの分析による研究報告では、高齢者看護の見方・考え方としてコミュニケーション能力の重要性があがっていた。受け持ち事例の特性をみても、脳梗塞後遺症による失語症や構音障害、認知症などでコミュニケーションをとることが困難な高齢者は多かった。実際の関わりのなかで様々な体験をし、多様な学びを得ることができたのではないかと考える。

高齢者への看護を実践するなかで、意欲を高めること、高齢者の個別性に合わせた看護をすること、見守ること、尊厳ある関わりをすること、強みを生かすことなど、より高齢者看護に必要なと思われるキーワードが記述されていた。これらのキーワードは高齢者のための国連原則において提示されている内容と多くの部分が重なっている。

3) 援助者としての自覚

今回の高齢者看護学実習 I において、学生は一看護者として、1人の高齢者を受け持ちさせていただき看護の実践をした。＜援助者としての気づき＞を得、＜看護師の役割＞や＜援助の基本的姿勢＞について考える機会を得ていたと思われる。今回の実習目標には提示されていないが、1人の高齢者の看護過程の展開をするなかで、一援助者としての責任が問われる場面を経験し、＜援助の基本的姿勢＞について考えるなかで、【援助者としての自覚】の芽生えに至ったのではないかと考える。

Ⅶ. まとめ

慢性期病院における高齢者看護学実習Ⅰでの学生の学びとして、【高齢者観の認識】、【高齢者看護の実践】、【援助者としての自覚】の3つが導き出された。2週間の病院での高齢者看護学実習を通して、学生はこの3つの視点から高齢者看護の学びを得ていることが明らかになった。今後は学生の学びと実習目標との関連についての検討が必要である。

引用文献

- 1) 住吉和子、岡野初枝：老人看護実習での学生の学び－実習施設による学びの違い－、岡山大学医学部保健学科紀要、10：35～49、1999
- 2) 宮地緑（編著）、松木光子（監修）：看護学臨地実習ハンドブック 基本的考え方とすすめ方改訂4版、金芳堂、96、京都、2010
- 3) 桑原洋子、水戸美津子、飯吉令枝：老人観に関する研究の問題、新潟県立看護短期大学紀要、2：47～58、1997
- 4) 伊藤豊美、住垣千恵子、後藤友美、他：老年看護学実習における看護学生の高齢者に対するイメージの変化、国立看護大学校研究紀要、9（1）：37～42、2010
- 5) 山田律子、井出訓（編集）：生活機能からみた老年看護過程＋病態・生活機能関連図、医学書院、vii、東京、2009
- 6) フロレンス・ナイチンゲール：看護覚え書改訳第6版、現代社、178～212、東京、1983
- 7) 小野幸子、原敦子、林幸子、他：高齢者ケア施設における看護学実習を通じて学生が表現した高齢者看護の見方・考え方－ケースレポートより－、岐阜県立看護大学紀要、4（1）：99～104、2004

